

第5報 石狩國占冠双珠別川上流の石灰岩

深 田 淳 夫 *

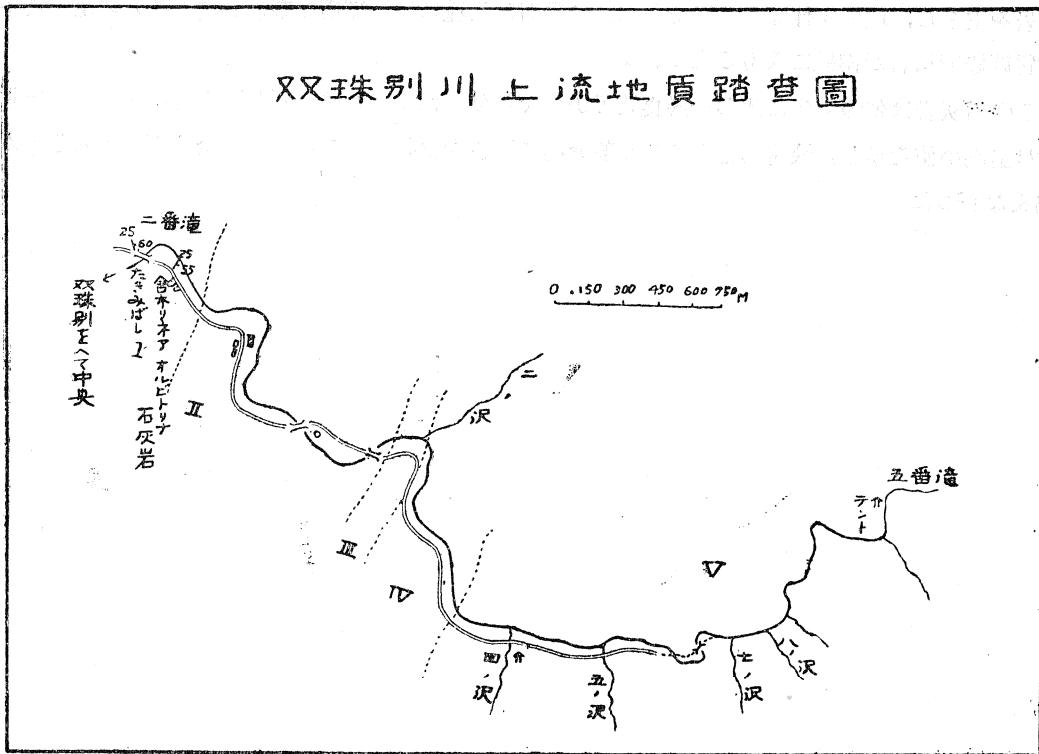
I 緒 言

1950年9月初旬、占冠村中央から双珠別川をさかのぼり、森林道路工事中の飯場を根據地にして、2番瀧から5番瀧に至る間の川筋を調査した。

目的とする石灰岩に就いては、此の調査區間には規模の大きなものは見出し得なかつたが、小規模なものは、2の層準にふくまれているのを知つた。

II 地質略説 (第10圖、双珠別川上流地質踏査圖参照)

第 十 圖



* 囑託 北海道大學助手

此の地域については既に大立目博士*の調査結果が明にされているが、報告者の踏査圖によつて一應説明を試みると次の如くである。

「(I) — (V)の番號は踏査圖の番號に一致する」

(I)は、典型的な細粒砂岩と頁岩(硅質)との瀕互層で、*Nerinea*を含む“オルビトリナ石灰岩”がこの中に夾在する。

(II)は、(I)の東につづく、砂岩を主とする地層で、淡青灰色の、粗粒塊状の砂岩であり、層理は明瞭ならず。一部礫岩質のところもあり、又硅質岩を夾在することもある。

(III)特に硅質岩の顯著な部分である。この硅岩層をへだてて、岩質は、輝綠凝灰岩質にかわる(IV)輝綠凝灰岩質の、砂岩を主とする地層であり、部分的硅岩の層を夾在している。

(V)輝綠凝灰岩乃至同質集塊岩が極めて多くなり、烏糞岩質のものもふくまれてくる。此の地層中にも結晶質の無化石石灰岩のふくまれているらしいことは、轉石が河流に散在していることから想像されるが、其の根源は知ることができなかつた。恐らく小規模のものであらう。

以上の觀察から層序をあむと、上流から下流に向つて次第に新期の地層がみられているらしく、上より、

I 細粒砂岩、硅質頁岩の互層

*Nerinea*を含む、オルビトリナ石灰岩をはさむ。

II 砂岩層(礫岩をふくむ)

III 硅質岩層

IV 輝綠凝灰岩質砂岩層

V 輝綠凝灰岩層

となる。各層間の接面の觀察は缺くが、何れも漸移するように想像される。

III 石 灰 岩

§オルビトリナ石灰岩

たえみばし南東のオルビトリナ石灰岩は厚さ數米のものが二枚あり、細粒砂岩乃至頁岩中に、約7米の垂直距離をへだてて發達している。兩者ともに不規則な形のレンズ状で、埋藏量は數万トンと見積られる。なお石灰岩中には、硅岩の小指頭大以下の亞角礫が入つて礫岩状を呈している部分もある。

興味深いことは、この石灰岩中に、長さ35糎以上、徑8糎に及ぶ巨大な巻貝 *Nerinea* や *Toucasia carinata* var. *orientalis* Nagao のような特異な瓣鰓類がみられることである。

* 大立目謙一郎・“北海道中部に於ける下部菊石層と輝綠凝灰岩層の層位關係に就いて、北海道地質調査會報告 第11號 昭和15年9月

§輝綠凝灰岩層中の石灰岩

前にも述べたように輝綠凝灰岩層中にはさまれている石灰岩は見られなく、大規模のものはないものと想像されるが、極めて小規模のものが轉石として川原に見られた。凡て無化石で淡青色を呈し、岩質から前記のオルビトリナ石灰岩とは容易に區別されるものである。